

「台湾歴史」教科書形成史研究

— ナショナル・ヒストリーの模索 —

薛 格 芳

[目次]

1. 本研究の課題意識
2. 先行研究
3. 各章の内容
4. 論文の成果と今後の課題

1. 本研究の課題意識

本研究は台湾における「歴史叙述」、とりわけ学校教育の歴史教科書の記述内容と叙述の変容について考察するものである。

歴史教育は、国家の歩みや先人の努力、文化の特徴等を理解することによって国民のコンセンサスやナショナル・アイデンティティを形成する重要な教科であり、慎重に取り扱われている。国民意識の形成は現代の国民教育の主要課題の一つであり、国民意識は歴史意識と密接に結びついている¹⁾。

台湾は、外来の政権によって統治を受けてきた。外来の政権の特色一つとして、台湾接收後、教育を通じて自国の歴史文化を台湾に植え付け、台湾人を自らの体系へと組み込もうとした。また、歴史解釈の権利を握り、台湾人に忠誠心を植えつけ、その統治を合理化、正当化しようとした²⁾。日本の統治下におかれた台湾では、近代的な、新式学校教育制度が実施された。歴史教育は、台湾人を均質な日本人に育成するため、日本と関連する部分のみを取り上げ、制限された歴史叙述となっている。一九四五年、中国の蒋介石は、日本から台湾を接收した。蒋介石は、中国共産党との内戦に敗れ、政権の中枢を台湾に移入し、台湾を反攻の拠点とし、長期に渡って、教育体系やマス・メディアを統制して、大中華意識の詰め込みと統治の正統性を強調する注入教育を施した。その結果、かつての歴史教科書において、台湾に関連する記述の比率は、僅か四.三%であった³⁾。

九十年代に入り、台湾の民主化と自由化とが進むと、禁圧は徐々に解除され、歴史教科書の内容も漸く歴史学者の「台湾を正常な国家にするためには、正常な教育が必要」、「歴史教育主体を台湾に⁴⁾」との働きかけに応じ、徐々に歴史教科書の叙述内容に変化が現れた。

本研究は、このような教科書における台湾史叙述の変容を分析し、あわせて、歴史教育における台湾史の取り扱いの経緯を検討し、従属的な扱いから、主体的な扱いへと移行した歴史的な背景を明らかにする。「想像の共同体」を構築する際の、ナショナリズムの拠り所となるナショナル・ヒストリーの形成の足跡明らかにすることを意図する。

社会学者の王昌甫が台湾の歴史教科書の論争について「異なった二つの民族の想像が台湾の「未来」(統一か独立か)と過去(台湾と中国関係及び日本統治の位置づけ)についての解釈権の争奪⁵⁾」であると指摘したように、台湾の歴史教育において、台湾主体 vs. 中国主体の論争に、歴史教科書の「日本についての記述」の争点は避けて通れない問題である。こうした日本統治時代に関する記述をめぐる認識や評価の違いは、教科書だけの問題ではない。台湾の社会が民主化し、自由となるにつれて、日本語世代が公の場で日本統治時代の内実を語るようになる。日常生活においても、実際に日本の統治を経験した親の世代と国民党の一元的イデオロギー教育を受けた子の世代との間で齟齬が生じた⁶⁾。その背景には、国民党は台湾統治を正当化するため、歴史事実である日本統治の実態を触れず、国民党軍の「抗日戦争」の詳細な記述が代替したのである。こうして、抗日戦争のみの歴史教育を受けた世代と実際に日本の統治を受けた世代の間に、異なる歴史認識が生じたのである。

本研究は台湾歴史叙述における変化、主に歴史教科書の記述内容に見る変化を研究対象とする。教科書の制度は、必要に応じて言及するが、制度そのものを主な検証対象にしない。また、教科書を論ずる際、日本の学習指導要領に当たる「課程標準」も必要に応じ、説明を加えるのみとする。学校教育を通じて、ナショナル・アイデンティティ、国民の形成に寄与した近代歴史教科書は一朝一夕にできたものではなく、紆余曲折をへて、少しずつ形成されたものである⁷⁾。しかし、外来政権による統治を受けてきた台湾の歴史教科書は異なった一面の特質を持つ。それは台湾における近代学校教育制度そのものは、一九四五年を境にして大きく転換され、歴史教科書の内容も否応無しに、大幅に変更された。歴史叙述の構築、再構築は往々にして社会の各階層の力を結合したものである⁸⁾ため、教科書以外の留意すべき歴史も取り上げる。特に、日本統治時代や国民党の国定教科書時代における台湾史は制限されたものである。その後の桎梏から解放された自由な空気の中で、新しい政治運動を背景に、台湾における教科書論争や歴史解釈を巡って議論された。分析に際しては、背後にある基盤も合わせて検討する必要があると考える。台湾社会の歴史観や歴史に対する時代ごとの政治状況、時代ごとの政治的な関与も総合的に検討を加えることとする。

2. 先行研究

本論文に関する先行研究を検討するに先立ち、台湾史研究の全体的な動向を検討することとする。

近代歴史学における「台湾史」の研究は、日本統治時代に誕生し、資料の収集から分析の基礎構築の系統を立て始めた⁹⁾。しかし、台湾は政治に翻弄され、そうした研究結果を受

け継ぐことは長い間できなかつた。戦後、国民党政府の初期の「去日本化」、続けて「中華民族精神強化」のための「大中国歴史」の独尊、そして長い期間の「白色テロ」等の原因で、台湾史研究は軽視されていた。また五十年余りの歴史を共有した日本でも似た状況にあった。檜山幸夫¹⁰は「戦後、日台両国における日本統治の台湾史研究は長い間にわたって停滞していた。日本での停滞原因は単なる歴史史的限界といったものだけではなく、多くの悲劇を生み出した過去の侵略と征服の歴史に対する深い反省に基づく全否定の論理に立脚しつつも、かかる『負の遺産』を総体的に把握するのではなしに侵略と抵抗を基本軸とする一面史の歴史論が過度に展開され一部に強烈な政治主義的歴史観に陥った結果として、学問的に十分な検討をされることなく短絡的に台湾史を『日本史』から切り捨て、且つ安易に『中国史』に組み入れた¹¹」と指摘する。また日本における台湾史研究の後継の研究者たちは日本史研究者はおらず、文学部史学科の出身も少ない。戦後の日本における台湾史研究は「歴史学界において極めて小さく、傍流であった¹²」と指摘されている。

戦後の台湾と日本はそれぞれ異なった理由で日本統治時代についての研究ができる環境ではなかったため、お互いの歴史や現状に対する認識には検討すべき課題が多い。しかし近年の台湾史研究は、日台双方ともに「急速な発展を成し遂げてきている¹³」とのことである。また、檜山は満足できる研究水準に達していない原因の一つとして「史料利用が充分、容易に提供、使用されていない」ことを指摘している。この点も、台湾側は相当に進んでおり、国立中央図書館の台湾学研究センターでは、日治時代の出版図書を、中央研究院台湾史研究所の「日治時期台湾研究古籍資料庫」においては、台湾総督に所属された図書、史料、臺北帝國大学等の蔵書を電子化になって検索できるようになっている。より古いもの、例えば、オランダ、スペイン統治時代の古文書等も電子化、系統化されている。

「歴史認識の空白¹⁴」を埋める努力が多くの人々の絶えざる努力により、少しずつなされているのである。

また、台湾の歴史叙述と国族認同（ナショナル・アイデンティティ）に関する研究は、特に歴史教科書について、日本においては極めてすくない。台湾国内の研究も、日本統治時代からの一貫した分析はされていない。

こうした中、教育の面から台湾のナショナル・アイデンティティ問題をアプローチした山崎直也『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ¹⁵』が、二〇〇五年に出版された『教育新辞書』にある本土化教育の解説を取り上げ、『後発国』が直面している「本土化」と違い、この狭義な「本土化」は台湾固有の問題で、教育内容に関わるものであり、一般の人々も当事者意識を感じやすい部分がある。したがって、狭義な『本土化』の問題がより大きな広がりをもって議論される」とし、台湾における本土化の「三つの特徴から、一過性のものではなく、台湾教育の本質的な変化である」とする。台湾におけるナショナル・アイデンティティに関する議論は、近年盛んに議論されるようになってはいるが、歴史教科書をめぐる通時的研究はなされていない。方法論として参考すべきものに、鈴木正弘の一連の研究がある。特に、「清末の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティ — 丁保書編著『蒙学中国歴史教科書』の考察 —¹⁶」「民初の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティ — 傅運森編『共和国教科書新歴史』の考察 —¹⁷」「民国期の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティの方向性 — 中等学校「中国史」教科書にお

る総論部の分析 — 18」は、本研究に先行する時期の中国における歴史教科書の分析であり、分析視角などに参考にすべき点がある。

3. 各章の内容

本論文は序章と本論を五章に分け、序章において、歴史教科書における日本・中国関連記述を巡る論争や対日意識落差生成の背景等を説明した。

第一章において、戦前の日本統治時代初期の台湾歴史像を最も端的に示す関口隆正著『台湾歴史歌』を研究対象とし、漢詩文と和詩文併記の叙述内容を「台湾固有史の関連叙述」、「日本との交流関連叙述①台湾領有前②台湾領有後」、「地理関係の関連叙述」、「中国との交流関連叙述」、「人物描写の特色」に分け、分析した。

第二章では、終戦直後の国民党支配初期に作成された『中等学校暫用中国歴史課本』を研究対象とし、初めて「中国史」を「本国史」とする本教科書を、終戦前後の概況と歴史教育状況を踏まえ、本教科書の叙述内容を検討した。

第三章は、国定歴史教科書の叙述内容の特色について分析した。国定教科書時期になると、「台湾歴史」に関する叙述は抑圧され、「中国」を「本国」とする国定歴史教科書によって思想統制を図ろうとした。本章は、該期の政治・社会の状況、ならびに歴史教育の課題を押さえつつ、「台湾歴史」抑圧の意味と、変化の様相を明らかにした。

第四章では、九十年代に入り、台湾を取り巻く国際関係、国内の政治状況、社会環境の変化に伴い、「台湾化」が様々な場面で求められ加速するなか、歴史教育においても、抑圧された台湾歴史の復権の要求が盛んとなり、一九四五年以来台湾で実施された「大中国教育政策」の転換の象徴¹⁹にもなる、系統的に台湾の歴史を教授する初めての歴史教科書である『認識台湾』が誕生した。本章において、国のリーダーとして変化を進めた李登輝の主張とその波及の様相を論じ、登場経緯を明らかにした。

第五章では、前章を受けて歴史教科書として結実した『認識台湾』について具体的に検討し、本教科書における歴史叙述の特色とそれをめぐる様々な論争を整理・分析することによって台湾歴史像の生成過程を解明し、新しい「台湾歴史」教科書登場の意義を考えた。

4. 論文の成果と今後の課題

本論文は、台湾における歴史叙述について、とりわけ学校教育で用いられた歴史教科書の記述内容について検討を加え、各時期の歴史叙述及びその変化の様相を明らかにしようとしたものである。本論文の結論と今後の課題は以下の通りである。

戦前、日本の領台期の歴史叙述は、極論すると、台湾人を日本人とするための歴史叙述であった。本論文では、関口隆正著『台湾歴史歌』を取り上げて検討を加えた。本書の特徴は、台湾固有の歴史も取り上げ、漢民族の移住前のフィリピン、マレー系の南洋人種の

存在に触れたことは、当時の研究結果を踏まえたものとみられ、合理的な認識である。また、台湾人が永遠に続く皇統に役立つ日本人になってほしいという期待を表明している内容も本書の大きな特徴である。

日本の敗戦にともない、台湾人を中国人とするための歴史叙述へと転換することとなる。本論文では、『中等学校暫用中国歴史課本』を検討した結果は、本教科書の構成上の特色としては、それまでの中華民国における中等段階の中国史に関する教科書の特色を持ちながら、「中国の歴史」と「台湾の歴史」の接続を図る工夫をする。後の国定教科書と比較すると、より多い比例で台湾について取り上げ、まとまった叙述をなしていることは、台湾の歴史教科書史上重要な意義を有している。しかし、これらの台湾史叙述内容は、台湾の独自の文化と歴史を否定し、徹底した中国観点の台湾史叙述であることが指摘できる。

国共内戦で敗れ、來台を余儀なくされた国民党は、「反共抗ソ・復国建国」、「反攻大陸」を国家の目標とし、中国としての正統性と台湾統治の正当性を維持するために、教育や様々な文化についてコントロールを加えた。歴史教育では、中華民族精神の注入によって、台湾人を中国人に育成することを目標とし、中国意識ないし中国に対するナショナル・アイデンティティを持たせることを目指したものとすることができる。

その後の国定教科書時代の叙述内容について、本論文では、五種類の教科書を、時代順を踏まえて検討した。その結果、教科書の叙述は、中華民国の漢族を中心とする中国の正当な後継者として位置付け、抗日戦争、反共抗ソを貫き、復国建国を目指す国定教科書の基調は踏まえて、ほぼ変わらなかった。また、台湾を付属的に位置付ける基調もほぼ変わらなかった。しかし教科書叙述を微細に検討すると、叙述に揺らぎのあることがわかる。

一九七〇年代、国民党政権を取り巻く国際環境は厳しさを増す。多くの台湾人の歴史ではない対日抗戦を感情的に叙述することは、国民党の台湾統治に対する危機意識の表れの一端と考えられる。全体的に、台湾の特殊性と主体性を否定し、「台湾歴史」の叙述を抑圧し、台湾の歴史を中国の歴史に都合良くはめ込もうとした。その後、こうした叙述は、台湾の民主化、本土化にともなって、徐々に変化が現れた。

時代の変化に応じて、一九九七年に「認識台湾」課程がスタートした。『認識台湾』（歴史篇）は二〇〇一年の小・中学の「九年一貫課程」の実施まで、それほど長く使用されていないが、台湾を中心とした視点から台湾の歴史を取り扱う点で、台湾の歴史教科書史上において画期的なものであった。本論文では、『認識台湾』教科書の登場する過程を踏まえた上で、『認識台湾』（歴史篇）を検討した。

『認識台湾』（歴史篇）は、「日本の殖民統治を美化」、「日本に媚びている」等の批判を受けたが、教科書の内容を検討してみると、日本の統治の影の部分もきちんと描いており、台湾を主体とし、客観性にも配慮した内容であった。また、本教科書は「国史」に位置づけられているが、一定の限界を有している。背景には、当時の政治状況や、国際環境がある。しかし、長きに渡り中国史に従属的な地位やわずかな記述しかない状況は改善され、完備した台湾史の全体像を想起させる。反対派は「中国意識の除去」を懸念したが、本教科書は、より現実に向き合って生命共同体である台湾における共通のアイデンティティづくりを目指したものと評すことができる。

台湾は、民主化、本土化にともなって、やっと独自の歴史を知るようとなり、中国史観から抜け出し、自らの歴史観を構築しつつある。現在、教科書検定制度へと移行し、歴史

教育における「台湾」、或いは「日本」「中国」に関する叙述は多様な角度から描かれている。こうした最新の動向は、今後の研究課題としたい。

合わせて、今回さまざまな制限で集めきれなかった戦前の公学校で使用された歴史教科書の叙述分析についても今後の研究課題としたい。

-
- ¹ 許毓峰『解嚴前後国小社会科教科書中的台湾図像』稻郷出版、二〇〇七年、一頁。
 - ² 張炎憲「国史館と台湾史研究」『日本台湾学会報』（第八号）、二〇〇六年五月一二九頁。
 - ³ 台湾の中央廣播電臺の「細説台湾」という番組の第二回放送「台湾の歴史、地理と公民教育」では、ゲストの歴史学者が小、中学校の教科書を分析した統計数字によっていた。番組の内容は、http://www.rti.org.tw/big5/recommend/taiwan/content/content_21.html で確認できる。（最終アクセス二〇一二年一〇月一〇日）また、数字に若干の差異はあるが、初めて中学一年生の郷土教育の教材として『認識台湾 歴史篇』の「試用本」が一九九七年八月に出版された際に起きた様々な論争の中で、戦後中国から移住してきた者の二世である、野党である民進党籍の台北市議員が「過去の歴史教材において、台湾の歴史はわずか三%で、台湾について学ぶ機会が殆どなかった」と嘆いた。いずれも低い比率である。<http://www.haixiainfo.com.tw/SRM/81-3352.html>（最終アクセス二〇一二年一〇月一〇日）
 - ⁴ 戴宝村「建立台湾主体性的歴史教育」自由時報 二〇〇五年一月一六日一五面。
 - ⁵ 詳しくは、王昌甫「民族想像、族群意識與歴史 —『認識台湾』教科書爭議風波的内容與脈絡分析」『台湾研究』『台湾史研究』第八卷第二期、中央研究院台湾史研究所籌備處、二〇〇一年一二月。一四五 — 二〇八頁。本文によれば四回の抗議デモ、八回の公聴会の他、評論、読者投稿、報道記事等三四一件、三回のトップニュースとして取り上げられた。他方、社会篇の編集主任委員である、また、社会篇を担当した杜正勝は初歩的な計算で、新聞報道二五〇件以上、社論一八本、コラム一〇〇編、読者投稿二〇〇近くあると、これらの資料は博士論文を書ける分量だと。詳細は杜正勝『台湾心・台湾魂』河畔出版、一九九八年、一五八 — 一五九頁。
 - ⁶ 代表的な話は日本でも良く知られ、日本敗戦後、取り残された「元日本人である台湾人」の様子が窺える台湾映画「多桑」の中、年齢を聞かれると「昭和四年生まれ」と答える大の日本最顶层で中国式な要素すべて批判するお父さんが子供たちに「漢奸走狗」と言い返されるシーンは印象的である。多桑とは「父さん」のこと。日本語から台湾語となった言葉の当て字。一九九四年に上映したこの映画は、監督である呉念真が自分自身の話を元に製作した。二〇〇七年東京で「生きていく台湾一人々の暮らしの観点から」という題目の講演において「この映画の英語のタイトルは『A borrowed life』、つまり『かりそめの人生』、なぜなら、ある日、他の国の国民になるということも、自らは選択できなかった。このようにすべての過程において、彼らは自らの意志で選択するということができませんでした。さらには、彼らが年を取るにつれてもたらされた、次の世代との衝突、文化や歴史のアイデンティティーでの衝突すら、そこから逃れることはできませんでした。そこで私は、この映画を通して、我々に誤解されたあの世代の人々のことがはっきりと認識されることを望んだのです。」と語り、この映画の製作動機を明らかにした。また胡慧玲の「若い命の愛國ミス (myth)」の中で「国民党に入党することが中国を救える唯一の方法だが、父親に反対された」と大学の同級生の高校時代の思い出話や、「天羅地網の如くの嘘を突破する決意」の文章において、自らの「両親が好んで日本語で話し、日本の歌を歌ったり、日本の映画を観たりするのに対し非常に不満…学校で教わった蒋介石は民族だけではなく、全人類の救世主である。…一年間の準備、二年目で反攻大陸できる等の事」で父親とよく喧嘩して布団の中で泣き「何でこの様な漢奸家庭に生まれてきたのか、父親みたいな漢奸がいるから、中国が衰退し、大陸が陥落した」と泣きながら神様に怨嗟し、「偉大なる大中国のために大義親を滅す」と決意した。「かなりの年をとってから往事はすべて隠蔽、欺瞞された記録で、知らないうちに自分も統治側の共犯者となったことに悟った」等の事例で気持ちの転換の歷程を綴っている。胡慧玲「年輕生命的愛國迷思」原文は中国語。迷思は myth の意味。『我喜歡這樣想你』二〇〇七年、玉山出版、二〇一 — 二〇四頁。
 - ⁷ 鈴木正弘「清末の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティ — 丁保書編著『蒙学中国歴史教科書』の考察 —」『歴史教育史研究』第九号、歴史教育史研究会、二〇一一年、二四頁。

- ⁸ 王晴佳「解構與重構 — 近二十年来台湾意識變化的主要趨勢」『漢学研究通訊』第二十五卷第四期、二〇〇六年十一月、十三頁。
- ⁹ 翁佳音「日本統治時代台湾史研究の継承と断絶 — 原住民氏の研究を中心として —」『現代台湾研究』第三九号、二〇一一年三月三十一日、八六頁。
- ¹⁰ 中京大学社会科学研究所台湾史研究センターのセンター長である檜山幸夫の話によれば、台湾史研究センターは「一九八二年、中京大学社会科学研究所に台湾研究部が設置され、台湾統治史を基とする台湾史研究を行い始めた」とのこと。そして、その研究成果を公開、活用するために設置された研究・教育機関が台湾史研究センターとのことである。また、二〇〇八年、四月に開設した当センターのホームページによれば、設立目的を「長年にわたって蓄積してきた研究成果を広く公開し、併せて台湾史に関する研究基盤を整備し、台湾史研究の一翼を担いつつ、併せて国内外、取り分け台湾の研究者や研究機関との連携をより強化して、台湾史研究の発展に寄与すること」にあるとする。中京大学社会科学研究所台湾史研究センターホームページ <http://www.chukyo-u.ac.jp/research/irss/taiwan/index.htm>
- ¹¹ 檜山幸夫「日本における台湾史研究の現状と課題」『台湾の近代と日本』台湾史研究会編、中京大学社会科学研究所、二〇〇三年三月、一七頁。檜山はさらに「歴史研究の領域だけではなく、日治下台湾史を研究課題として日本に留学した台湾人留学生を機械的に「中国史」に割り振る」等のことも指摘している。国籍まで「中国」とされていた台湾人である筆者は、このような厳しい現実を経験し、痛感している。
- ¹² 同前、一九頁。
- ¹³ 同前、二頁。
- ¹⁴ 周婉窈「二度の『国引き』と台湾」『東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第九号、二〇〇五年三月、一〇九頁。
- ¹⁵ 山崎直也『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂、二〇〇九年。
- ¹⁶ 『歴史教育史研究』九、二〇一一年。
- ¹⁷ 『教育社会史史料研究』四、二〇一三年。
- ¹⁸ 『歴史教育史研究』六、二〇〇九年。
- ¹⁹ 譚光鼎は『認識台湾』成立の遠因として、一九四五年以降台湾政治環境が変化し、小中学校で教えた歴史、地理の課程内容は「大中国主義」をその基本として、教科書における「台湾」についての解釈は隠ぺいと歪曲されたものであると指摘する。譚光鼎「国家覇権与政治社会之探討 — 以『認識台湾』課程為例」『教育研究集刊』第四五輯、二〇〇〇年。一二四 — 一二五頁。